

2022年7月

## 課題本『康子十九歳 戦渦の日記』

門田隆将/著 文藝春秋 2009年

以前読書会では、『新・ローマ帝国衰亡史』を課題本としたことがあります。より深くローマ帝国を知るため、理解するために前の月の読書会では、ローマ時代の政治や経済、教育やその時代のローマ人の「食」生活や暮らしについて等々、いろいろな方面からの文献を手分けして読んだことがあります。今回は6月の課題本『康子十九歳戦渦の日記』からそれぞれ課題をもち繋がりのある本を読んで、どうしてその本に繋がったのかを含めて感想文を書いてみようということにしました。

課題本は、原爆によって亡くなった広島市長栗屋仙吉氏の次女栗屋康子さんの日記と、兄弟や友人、知人に書き送った多くの手紙をもとに書かれています。戦争があらゆるものを巻き込み「渦」のように大きく広がっていったことを物語っていると読書会では感じることができました。まさに康子さんの言葉をベースに生まれた本といえます。今回は、感想を「三行感想」とし自分のテーマを見付けて、次の本を読み、それぞれの言葉で「物語ってみよう」ということになりました。次回8月の読書会感想文で世界を広げましょう。

(読書会世話係)

### 読書会の余韻の中で「三行感想」

#### ◆【吉川五百枝】

メモ①

フィクション作品かノンフィクション作品かは、虚構かどうかの違いです。その意味での分類が一般的ですが、私の中での分類は、「まとめた人が顔を出していればノンフィクション作品とは言いがたい」。だから 殆どフィクション作品になってしまいます。実在の人物で構成されていますが、その人達の出来事を結ぶ文章は著者のもの。著者がどんな顔をして登場者を繋いで行くかを嗅ぎ取る興味があります。

メモ②

題名の「せんか」は「戦戈」でもなく「戦禍」でもなく「戦渦」です。戦いは「渦」のように、有無を言わず引き込んで行く力と読みました。人々の間では、戦いは大小内外あれど必然のこと。恐ろしいのは、ただ一つの巨大な渦が、全てを飲み込んでいくこと。人間の数ほど渦の数もあれば良い。我執の渦が人間の数ほどあって、自由に離合集散を繰り返していれば、平和な日常茶飯事の風景となりますが。

メモ③

「戦局は一大飛躍をとげ」「若桜の壮挙」「純粋な正義感と愛」「国の恥」「特攻は目的であって手段では無い」「愛国の至情萌ゆる」「誇りと気高さを失わなかった日本人」「死ぬことで

しか国への忠義は果たせない」「出陣していく人は神々しい」「皇国の必勝」「悠久の大義」「一億全霊の聖戦」「天皇の為に死ぬる」あれほど周囲の人から褒め称えられている康子さんが、書き記した言葉たち。まったく疑問をだいていない言葉使いをもたらしたのは、どうして？ その精神を育てたのは、なにもの？

#### ◆【 TK 】

かなしい現実の本で、初めて涙をポロポロ出しながら読みました。美しいことば使いと短歌の小筆習字も達筆でした。いつも前向きで人や家族思いに感心させられました。

#### ◆【 YT 】

彼女は戦時下の厳しい中を前向きで、聡明で、誰に対しても慈愛の心を持つ事ができる素晴らしい女性であったと思います。まだ、19歳と言う若さで戦争の渦に巻き込まれ、翻弄された生涯だったけれども、精一杯生きた彼女の証として、この本が後世の人たちに読み続けられる事を願います。戦争の愚かさを感じずにはいられない、今の私たちに何ができるのかを問われた作品でした。

#### ◆【 N2 】

ノンフィクションとして書かれているが、全てがそうではないということ。

作品を読んだ時、作者は読者を右・左・上・下どこを向かせようとしているかとの話は、目から鱗が落ちる想いでした。出席して得る事多しでした。

#### ◆【 SM 】

題名は『戦渦の日記』。著者門田隆将が栗屋康子等の生き様に戦争による「禍」ではなく、戦争に巻き込まれた人々の「渦」を強調したかったのか。

渦に巻き込まれた一人、康子が言った言葉「特攻に行く人は誇りだけど、同時にそれを強いるのは国として恥でもあると思います」。この言葉は、相手が台湾人の留学生で特攻を志願し、気が知れた梁敬宣だからこそ言えた言葉だったのだろう。聞いた梁は、さぞ息をのむ思いがした事だろう。彼女は勤労働員の日々で疲労困憊する生活に右往左往するだけでなく、視野も広く戦争の先を考えていたのだろうか。

栗屋康子の日記や手紙には、「誇りある栗屋家」「家族への愛情」「私は勝つ」という言葉が迸り、自らを鼓舞する行動や立ち振る舞いにも感動する。しかし、どうしても彼女の強い決心の言葉の影に、哀惜や哀歌を感じてしまうのだ。私の思い込みだろうか。

### 『康子十九歳 戦渦の日記』を読んで

#### ◆【 YA 】

康子を含む家族の命、生活、喜び、未来を奪った戦争に翻弄された彼女の目から見た日記の物語だ。

戦争に関するものは、今まで沢山読んで目にしてきた。つい最近も読書会で取り上げた『それでも日本人は戦争を選んだ』『生きて帰った男』などみんなで話し合った。戦争は一般国民が多くを知らないうちに始まり、それはなかなか収まらず長引き、又犠牲になるのは一般国民が殆どということにある。

この日記で、若い10代の女性の軍需工場の劣悪な環境の中での生活の描写は悲惨極まりないが、若者の前向きな明るさはちょっぴり救われる。このような状況の中、康子の家族を思いやる沢山の手紙や気持ちは康子の家族の絆がよく表れている。

辛いなかでも家族の生活は続いていたが、終止符が打たれたものが原爆投下だった。康子の父親が当時の広島市長だったのは初めて知った。両親と弟が被爆し、父親と小さな弟は目を置かず亡くなり、母親を介護する為に広島に入り、二次被爆で康子は19歳で亡くなる。核の恐ろしさは命を消し、生活を破壊し、何年も被爆の影響が残ることである。77年も経過しているが、被爆の苦しみは続いている。

7月の読書会の3日後に新聞の記事にあった、77年前の7月16日、核兵器の開発「マンハッタン計画」は成功をみた。計画を率いたオッペンハイマー博士は実験成功までは国家的重圧に耐え、成功させて終戦を早めたいという思いに駆られていた。しかし原爆投下後、心境が変化する。「科学者は罪を知った」と。政策に反対し続け、要職から追放された。

戦争は他国に侵攻し、そこに暮らす人々の生活と命を奪う。始まりは簡単、終わらせるのは並大抵のことではない。お互いの恨みやつらみは何十年・何百年も続き、精神的にも物理的にも支障を残す事になる。今現在ロシアのウクライナ侵攻は5ヶ月になろうとする。一体どれだけの人が亡くなり、生活、未来が破壊されるのだろうか。核の存在が侵攻の背景にあることを思うとき、核廃絶こそ今求める時である。

## ◆ 【 TK 】

かなしきかな。

初めて本を読んで涙がとめどもなく流れました。

ウクライナの戦禍の今戦争は変わらないなとつくづく感じました。

康子さんの小筆の達筆なこと、短歌のうまさにとっても渋くて19歳とは思えません。

そして言葉遣いから学業、家族に対する思いやりは天使のような優等生を思わせる。

しかし、読書会で学んで新たな発見をしました。

国家や家族に対する専心的な態度は天皇とか教育勅語によって統制されたものによりできあがっている。

まだまだ私は日本の歴史と時代、人々の気持ちがわかっていなかったと反省させられました。先月の本は現代の多様性を認めることについて学びましたが今月のこの本は全く逆で統制して国を作り上げようとする日本の歴史を再認識しました。疑問を持つことなく尽くすことに美德をもたらしていたのでした。

そして天皇とはいったいどんないきさつで生まれたのか来月掘り下げて他の本を読んでみたい。

そしてさらに台湾と日本の戦後の関係者も初めて知りました。台湾が勝って日本の敗戦となりさらに台湾の独裁政治へと続いたのです。その時から人間関係は変わらずとも立場の変化が生じるのです。この中で康子さんは愛される存在なのです。時代や立場が変わっても人への心は変わらない愛は尊いものでした。

最後に日記についての皆さんのご意見を聞いて楽しい話もできました。日記までも人を築き上げようとする康子さんの内容に感心いたしました。日記ってついつい自分だけの世界になってしまうだろうに。

奥ゆかしい人にかいまみれました。

## ◆【 T 】

原爆投下により亡くなられた広島市長栗屋仙吉さんの次女康子さんのお話。高等師範学校附属高等女学校専攻科で学んでいたが戦争が激しくなり、昭和19年秋より学徒動員により東京第一陸軍兵廠で武器弾薬製造に従事し、昭和20年11月に亡くなられるまでのことが日記を中心につづられている。

彼女は、それまで通ったどの学校でも首席になり、抜群の学業成績で、きょうだいの中でもピアノ、歌、書、和歌、語学・・・どれをとっても群を抜く才能を持っていた。

優しく思いやりがあり、わずか9歳(3年生)で集団疎開をした妹の近子にあてた手紙では、近子に対する深い愛情が読み取れると共に、表現力の豊かさに感心させられる。

国のため家族のためにと一生懸命に過ごす康子だったが、真面目にひたむきに頑張るがゆえに疲れもたまり、家族も離れ離れになったこともあり、だんだんと寂寥とした寂しさ、辛いというのではなく抛り所ない、何に対しても意義の見いだせない無限の憂愁、救い難い気持ちになってくるのであった。

当時の人が、「こんな状況はおかしい。」と声に出して言うことは難しかっただろうし、また、康子も真面目な若者で、国のため家族のために頑張らなくてはと考えていたが、心の奥底で、当時の状況に対して小さな疑問がわき、それが漠とした不安につながったのではないだろうか。

大きな夢や希望を持ち青春を謳歌できる若い人たちが、戦争という極限状態の中で、いつ死ぬかもしれない、別れたら二度と会えないかもしれないという不安やストレスを抱えながらも一生懸命生きている姿の中に戦争の悲惨さ、残酷さが表れているように思える。

## ◆【 N2 】

十九歳で亡くなった康子さんの日記と伝聞から全てにおいて並外れた才能と人格を持った、なんて素敵なお方だろうと感じました。クリスチャンである康子さんの家族への愛情と毅然とした態度が、優しくすがすがしく感じられます。

しかしこの日記は他人に読まれることを前提に書かれているのか、本音を書かれているのかは疑問の余地があります。この本はノンフィクションとも思われるのですが、あくまでも日記

と伝聞をベースに組み立てられた小説ではないでしょうか。作者の思いと想像ではないかと思う部分が多くみられます。

戦時下の中上流階級の青年たちの暮らしと学業、青春の感情が書かれているので、豊かさ、あこがれ、清潔さ、純真さを印象付けられます。しかしこの知性溢れる康子さんにしても136 ページには「世を制する者は化学、物量に非ざる事を信ず。必ずや時あって、彼等を更に制するは神霊の働き有る事を信ず。但し、一億全心全霊を聖戦の為 打ち込む姿になり得た時、その時に神霊は働き給ふ」と記しています。それと別に特攻を志願していた梁さんに「特攻に行く人は誇りだけど、それを強いるのは国として恥でもあると思います。特攻とはあくまで目的であって、手段であってはならないと思う」と告げるのですが本当にこう告げたのでしょうか？ 戦時下で「国の恥」と口にする凛とした勇気があったのでしょうか？ そうだとすれば梁さんをよほど信頼して口にしたのでしょうか、どちらも十九歳の康子さんの本当の考えなのでしょうか。作者の創作なのでしょうか。現代では化学、物量と神霊に関しその様な考え方はとても出来ないのですが、当事の情報はラジオや新聞からがほとんどだったのと、統制されていたので自由に情報を得ることもできず洗脳されていたと聞きます。ほとんどの国民が戦後になって事実を知ることが出来たのですが、戦時下においては情報を得ても行動する勇気を持つのは難しかったです。

戦争の渦に巻き込まれた一人に台湾人の梁さんがいるのですが 日本領台湾人の彼は十代で留学して日本人以上の日本人になろうと頑張ってきたのですが、日本の敗戦で戦勝国人となり母国の台湾に戻ってからは国民党政権の下で隠れるように暮らし、のちに一時はアメリカへの移住を考えるほど、自分の存在をどこに置いたらいいのか大変悩まれたようです。戦争の渦に巻き込まれるのは、戦時一時ではなく戦後も渦中に飲み込まれたままの人もいます。広島、長崎を考えると、戦後七十七年たった今でも苦しんでいる方々がいらっしゃいます。

当時は普通の人々が情報を得る手段が限られていたのですが、現代はネットを使ってある程度の情報を手に入れることが出来ます。これだけ知性溢れる康子さんでも洗脳され軍国少女にならざるを得なかったのは仕方がないのかもしれませんが、疑問を持てば調べる事ができる現代では疑問を持ったら自分で調べる事が大切だと思いました。

## ◆【 K子 】

この時期(7月)になると課題本は戦争に関するものを扱います。

多くの作品を読んできました。いつも思う事はこんなことが実際にあったのか？ その事に参加せざるを得なかったのか？ (反論は無理？) ととても信じ難い事ばかりです。今回の作品は作者の門田隆将さんはノンフィクションと言っています。(が?) 実際に粟屋康子さんの残された多くの手紙、日々の日記、折々の短歌(達筆さに脱帽)等が登場します。主人公の「粟屋康子」さんを表現するにあたって「聡明」の二字でかたづけるには、あまりにも字足らずの感も否めませんが……

十九歳にして素晴らしい叡智を持った彼女が死ななければいけなかったのは？ 戦渦(禍ではないのです)のせいだったのかも知れません。

どんなに抗っても巻き込まれてしまう。多くの若者が教育によって偏った方向に導かれたのでは？ 残念な気持ちが残っています。

彼女が生きていたら、戦後の日本女性達の目印になれたのではないかと思います。彼女の死因は二次被爆です。父は広島市長栗屋仙吉さんです。母は辛うじて助かりましたが、康子さんが母親の看病をしたのです。もし原爆にたいする詳細が早く開示されていたら彼女の死はなかったかも知れません。